



經典餘師

近思錄

一

4

5

11
2047
33



門口 11
卷 2047
卷 33

自序

學問之道，無它，博文約
禮而已矣。博文者，讀書
接物，以多其見聞，皆是
也。約禮者，收斂其博而

歸之於踐履是也。登諸
醫藥以省君臣佐使位
也。使也亦皆臣也。以三
臣而輔一君也。非以一君
而役於三臣也。故約禮

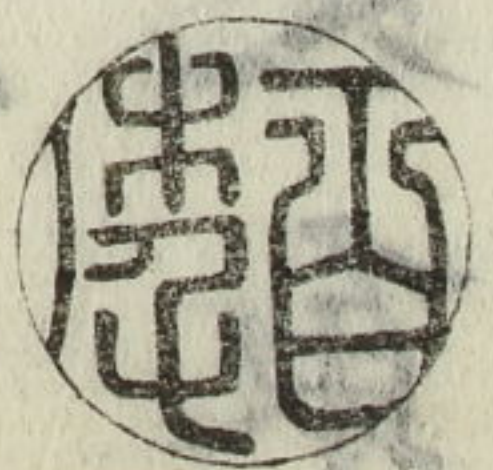
君也。博文臣也。古之君
子多其臣者。欲以成其
君也。後世學者遺棄其
君而唯其臣。是取將以
誇其濟。之多也。不亦

左乎、朱文公編此書、名以近思、其意雖在自卑升高、自迫及遠、而其患後世學病之如是、而欲以省瘳之也、蓋亦省焉。

余也不自揣、嘗以國字略解四子六經及小學書、以便童蒙、今又取此書解之、願讀者能內視而不外驚云爾。

天保壬寅夏六月

讚岐百年溪撰



雲棲早瀨乾瑞書



跋

象初俗讀華友之也
者百人而子過一二故
何者以字字常子解目
難水解也百年先生

嘗有餘何之撰六經
四子小學皆以本大
初千世維聖家之業
毒而續之之所以續
之者以國字解之易

通曉也之語近思錄
餘何本蓋之志在
升字自卑仍幸自
近焉嗚呼先生之
功大矣石書料森

本之需以一語附卷

末之

沿義心山



近思錄餘師卷之一

漢氏譯

道體類凡五十一條

濂溪先生曰無極而大極

仰で

て高くかぎりの日月星辰青黄赤白黒の雲霧霞

田林木叢林あり名付て地とり以上との分ハ眼より

球の天地ありその實ハとて天小してそのうち地

る小初よりならぬよつて空々混沌究極るをその天地

始初のその前を説又陰陽の分るれその前をい

朱子られを得るりとい伊仁齋是を誹るらるる

讀法

近思錄餘師卷之一

道體の類凡て五十一條

濂溪先生の曰

無極にして大極



非動而動也。太極動而生

陽動極而靜靜而生陰靜極復動一

動一靜互為其根分陰分陽兩儀立

焉大極の内動氣を陽の静を動のふあはばそのゆへに静を動かすも

動一靜互動は静の根なり静は動の根なり

陽變陰合而陽は動陰は静

生水火木金土五行の氣をまざるる

四時春夏秋冬

陽變陰合而陽は動陰は静

生水火木金土五行の氣をまざるる

四時春夏秋冬

陽變陰合而陽は動陰は静

生水火木金土五行の氣をまざるる

四時春夏秋冬

陽變陰合而陽は動陰は静

生水火木金土五行の氣をまざるる

四時春夏秋冬

陽變陰合而陽は動陰は静

生水火木金土五行の氣をまざるる

四時春夏秋冬

陽變陰合而陽は動陰は静

五行一陰陽也
陰陽一太極也
太極一陰陽也
無極一陰陽也

五行の生ざる也
各其性を一と
る無極の真二五
の精妙合して而凝

の一季と一又これを五と順は布
して四季の時節行焉とまはしむ

五行一陰陽

也陰陽一太極也太極本無極也

火木

土金水の五行何れも其体質を異ひ四季土用何れ
も冷暖寒熱の気を異ひもれも皆陰陽を離るる

陰陽一五行も陰陽の一より出づるものありま

太極といふ名あれども実右小
五行之生也

各一其性無極之真二五之精妙合

而凝 太極より陰陽の兩儀を生じ而儀より五
行を生じ火の熱と水の冷然なり各々

その性質を一とふ
混沌なる本休より陰陽の二つと火木金土の五

行精力の吉粹する一と各々全休の形
質を凝成するを奇を妙なりも更なりとを

乾

乾道ハ男を成
坤道ハ女を成
二氣交感して

萬物を化生し
萬物を生じ
て變化窮る

惟人也其秀
得而最靈なり
形既生ト矣神
發して知矣五性
感動而善惡分
萬物出矣

道成男坤道成女二氣交感化生萬

物萬物生而變化無窮焉

一の數より一二三と物を生じ
二の數より二と物を生じ
三の數より三と物を生じ
四の數より四と物を生じ
五の數より五と物を生じ
六の數より六と物を生じ
七の數より七と物を生じ
八の數より八と物を生じ
九の數より九と物を生じ
十の數より十と物を生じ

夫婦の交りて感して万物を生じ

惟人也其秀

得而最靈なり

形既生ト矣神

發して知矣五性

感動而善惡分
萬物出矣

聖人定之以中正仁義而主靜

聖人定之以中正仁義而主靜
極焉
○聖人教を下の民に説かばことごとし仁愛を以て義理を説くは人情欲を引くは心づかざるなり

故曰聖人與天地合其德

故聖人與天地合其德
四時合其序鬼神合其吉凶
故曰聖人與天地合其德日月合其明

故曰天之道與地之道

故曰天之道與地之道曰柔與剛
立人之道曰陰與陽

經典錄

近思錄卷之一

四

曰仁與義

聖人天地人三の道を立たまひて人

柔と剛とを曰人

之道を立て仁と義と曰

と讀て天道小てハ雨ふりつた地氣成困て病くやみ

世間ハ柔と剛とを以て柔と剛とを以て柔と剛とを以て

木鳥動を以て人の氣生も亦あり仁とハ上よ

又曰原始及終故知死生之說大哉

易也斯其至矣

始を原るんがハ本と終を

又曰く始を原

終を反る故に死生の說を知る大哉易也斯其至矣

又同断ありきるハ存命をねがひ死をなす

地の間万物不度其道理とて易ハ備具故ハ大哉と

誠ハ無為幾善

誠ハ其至極

誠無為幾善惡

誠ハ直

自然なるゆへ此ハ無と心ハ善惡ハ宿る

德愛曰仁宜曰義理曰禮通曰

智守曰信

德ハ得の字の義と相似たり但し得の

德ハ愛と仁と

曰宜を義と曰理とを禮と曰通

るハ智と曰守るを信と曰

人の身ハ有限と有りて高きと卑しと老と

性焉安焉之謂聖復焉執焉之謂賢

發微不可見克周不可窮之謂神

性焉安焉之謂

聖と復焉執焉之謂賢

發微見之... 周窮之... 神と謂

伊川先生の曰喜... 怒哀樂之未發之... 在中と謂中也者

發して皆節... 之を和と謂和也... 者感而遂通

心一也體を指て... 而言者有用を... 指而言者有り

乾天也天者乾

のま... 伊川先生曰喜怒哀... 哀樂之未發謂之中中也者言寂然不動者也故曰天下之大本

不動者也故曰天下之大本... 發而皆中節謂之和和也者言感而遂通者也故曰天下之達道

言感而遂通者也故曰天下之達道... 也有指體而言者有指用而言者惟觀其所見如何耳

○乾天也天者乾之形體乾者天... 觀其所見如何耳

の形體より乾の
天の性情より乾
健より健
息無きて之を
乾と謂

夫天專之を言
則道より天且
違むと云へん
也

分て之を言則ハ
形体を以て之を
天と謂主宰を

以て之を帝と謂

功用を以て之を
鬼神と謂

妙用を以て之を
神と謂

性情を以て之を
乾と謂

四徳の元ハ五常の

經典餘節

之性情乾健也健而無息之謂乾

夫天專言天之則道也天
且弗違是也

則以形體謂之天以主宰謂之帝
分而言之

以功
用謂之鬼神

妙用謂之神
以性情謂之乾

四徳之元猶五常之仁

經典餘節

仁小猶一

偏小言則一
事一專一則一
則一四一者一

天の賦する所を
命と爲物の受
所を性と爲

鬼神造化之
迹也

剝之卦と諸
陽消剝して已
盡より独上九
爻の尚存する有
碩大之果りの
食せ見不して復
生ある之理の有
將が如し

上九も亦變する則
純陰矣然も陽
不可之理無し上

春ハ芽と出花と夏ハ葉と秋ハ實と冬ハ地中ハ陽氣とたくりて來年の万葉万物の元氣を一つたり人同ハ仁義社智信五の常道有ハたを春夏秋又土用の五有ハ猶きと右以上四の徳の元ハ仁義社智信の元有仁有りり

言則一事專言則包四者

右の仁と信と

天所賦爲命物所受爲

性命を人同と爲物と賦する付中人の老女男女草木鳥獸

鬼神造化之迹也

天地ハ百万の鬼神ハ人目ハを

剝之爲卦諸陽消
自然と中するを

之果不見食將有復生之理

天地の間

物の更代々々して事欠る物の剝尽すの理ハ完きどしの義を示してる易の八卦剝の一爻存在して危きと云へる一たは碩大の果物の食つて種一つ二つのり

九亦變則純陰矣然陽無可盡之理

於變乎則下於
生之間息を容
可也か一也聖
人此理を發明
以て陽と君子之
道との七可く不
を見也

或いひの曰く剝
則純坤と為る
豈復陽有ん乎
曰く卦を以て月
配する則ハ坤ハ十
月ハ當る氣の消息
を以て言則ハ陽の

剝を以て坤とハ陽
の來を復とハ陽
嘗て未也上小
剝を以て則ハ
下於生矣故小十
月之を陽月と謂
其陽無と疑ハ
とて恐也

陰も亦然る聖
人言不耳

經典餘節

變於上則生於下無間可容息也聖
人發明此理以見陽與君子之道不
可亡也

剝の 一三三四五を陰の上の九一を變す
る則ハ陰純なり 夫れんども陽の終とて道理
ハるにのちて高より上つるも變して下より下
つりつるも上小の易の同も有るとし

或曰剝盡則為純坤豈復有
陽乎曰以卦配月則坤當十月以氣
消息言則陽剝為坤陽來為復陽未
嘗盡也剝盡於上則復生於下矣故

十月謂之陽月恐疑其無陽也

上九一爻の陽も剝盡るとハ坤純の形
豈ハ陽とハ名の有とハとらるる
月ハ配るとハ十月ハ坤の卦ハあり又月陽の消息
息とハ言とハ陽の剝とハ十月とハ坤とハとらるる
を一月未復の月とハ十月の十一ハ十一月の十一
きとらるる嘗てより終とハ古よりハ上小
又ハ下小未復して生むるハ十月ハ陽月とハ實ハ陽
地也下小とハ生むるハ十月ハ陽月とハ實ハ陽

陰亦然聖人不言耳

陽の義よりハ生雲の諸神御留主なりといふも
神毎月とハ人として神ハ陽のきとらるる反て十月を
陽月とハ人の言
陰も亦然る聖人不言耳

九

一陽復於下乃天地生物之心也

先儒皆靜を以て天地の心を見と為さ蓋し動之端乃ち天地之心を以て知不き道を知者非と執能之を識ん

仁者天下の公善之本也

感有必ず應有凡そ動有皆感之を為そ感ざる則ち必ち應有有りざる所ハ復感ざる也感通之理ハ道を知る者ハ黙して

一陽復於下乃天地生物之心也

物之心也

皆以靜為見天地之心蓋不知動之

端乃天地之心也非知道者孰能識

之

先代の漢の儒者が天地の心ハ無といふものにて自然と静小清浄なるものとぞし人ハ動といふ

人の心ハ欲心小まといふて濁り之を無といふは何も無て清く念ふ有くは欲

心は動は色と心とを但し天地の万物を以て

動は色と心とを但し天地の万物を以て

仁者天下の公善之本也

有感必有應凡有動皆為感感則必有應所應復為感所感復有應所以

不已也感通之理知道者默而觀之

可也天下之理終而復始所以恒

而不窮

仁心善心のところ厚内は動は外は静

感應ありて神明よむ感通するも止せん

仁心善心のところ厚内は動は外は静

感應ありて神明よむ感通するも止せん

之謂也一定則不能恒矣唯隨時變
易乃常道也天地常久之道天下常
久之理非知道者孰能識之

恒者久也一定之謂也
非恒也一定之謂也
則恒也一定之謂也
矣唯時一變而
變易也乃乃
常道也天地常
久之道也天下常
久之理也
非知道者孰能
識之也

のどうりなり 黙然して人目も可觀とぞと有り 天地の理の
どうりなり 何れも有り 終るなりとすれ
の止のとり人ことハるの義なり 恒非一定

之謂也一定則不能恒矣唯隨時變
易乃常道也天地常久之道天下常
久之理非知道者孰能識之

○人性本善有不可
識のいありとぞ
人道を悟るの外孰
人道を悟るの外孰
識のいありとぞ

人性本善有不可
識のいありとぞ

曰く其性を語
則ハ皆善也其
才と語則ハ下
愚の移ら不右

所謂下愚有二焉
有焉自暴也自
棄也

草者何也

人間の性情ハ元来善根を有する
小変ト草と云ふハ何也
朝やめて毎我我心を
朝やめて毎我我心を
朝やめて毎我我心を

才則有下愚之不移

所謂下愚有二焉自暴
也自棄也
右に謂る愚智無智ハ二焉あり
人苟以

人苟くも善を以て自ら治則ハ移可
不者無昏愚の至
雖皆漸磨一而進
可

唯自暴の者ハ之
拒不信せ不
自棄の者ハ之
小也不
与居難化
能不也仲尼
謂所下愚也

然少も天下の
自棄自暴の者必
らば皆昏愚な
る非也往々強
戾かして而て才
力の人小過ること右
者ハ商辛是也

聖人其自ら善
を絶て以て之と下
愚と謂たり然
れも其歸を考る
れば則誠愚也

既下下愚と自其能
面と草ハ何也

善自治則無不可移者雖昏愚之至
皆可漸磨而進

唯自暴者
拒之以不信自棄者絶之以不為雖
聖人與居不能化而入也仲尼之所
謂下愚也

有又自身は善道を絶棄て善道ハ不為ること
所謂下愚也

然天下自棄自暴者非必皆
昏愚也往々強戾而才力有過人者
商辛是也

聖人以其自絶於善謂之下愚
然考其歸則誠愚也

愚其能革面何也
曰心雖絶於

既下下愚と自其能
面と草ハ何也
曰心雖絶於

曰心善道於絕雖其威也畏而罪也寡其有與人同所以知其非性之罪也

物之在理為物為動靜端無陰陽始無道者孰能識之

正理失序則不和

明道先生曰天地生物各足不之理無常小天下之君臣父子兄弟夫婦多少分不處有人

忠信德進之所

善道其畏威而寡罪則與人同也唯其有與人同所以知其非性之罪也

在物為理處物為義動靜無端

陰陽無始非知道者孰能識之

仁者天下之正理

正理失正理則無序而不和

明道先生曰天地生物各無不足之理常思天下君臣父子兄弟夫婦

有多少不盡分處

忠信所以進

德終日乾乾君子當終日對越在天

天の初小對越也

蓋上天之載無聲無臭其體則謂之易其理則謂之道其用則謂之神

其人于命也則性之謂性率則之謂道道之謂道則之謂道

也 孔子の人は教たり人ハ教教は信の四なりとの多し

蓋上天之載無聲無臭其體則謂之易其理則謂之道其用則謂之神

天道の教を説くもの先上天を仰ぐれば声も臭も

其命于人則謂之性率

性則謂之道修道則謂之教 人間性也

孟子其中去浩然之氣を發揮し出さず

故不説神其上小在が如く其左右大在が如く大小の大

孟子去其中又發揮出浩然之氣可謂盡矣

故説神如在其上如在其左右大小

小大事而只曰誠之不可掩如此夫

不此の如夫しり
徹上徹下此の如く
る子遺を

形より而上を道と
為形より而下を器と
為須此の如の説と
著く須器も道も
道より道もも
器あり

徹上徹下不過如此

清淨より信心をこ
も皆然なりと説き丹誠をこ
も皆然なりと説き丹誠をこ
も皆然なりと説き丹誠をこ

形而上為道形

而下為器須著如此説器亦道道亦

器 形よりして上るものよりハ形を以て形あり下
るものよりハ器の有りて上るものよりハ天の陰陽の道ハ春

花咲て礼讓のうつくしさを享るりとて物の次第小
享遠るりとて秋を義とす氣かきまきて物の成就し
実のるりと冬を智とす何夏も肉もくくして外よりかひ
がうれとハ人なるに家も外より恐もてうかハ夏ハ大家
とハいも外より人の有無をさすハひとハ是皆自然
の道理して形ハ器又形有るとハ君ハ上ハ位
また多の人民を治たまは且官職をうけて吏をさすハ持

但道の在りて得
今と後と己身人
小繫不

医書手足痿痺
此言最善名状

仁者ハ天地万物を
以て一體と為し己を
非と人として莫也己

あつて其外進退周旋の礼義作法太刀馬代等の器限
る如此ハ説物変小配着てくるとハ必竟の所ハ道といハ
器あり器といハ付て道
もさつてとんとありハ

後己與人

道を厭の習の字の外ハ有りハ己の今
の後のことかありハありハ
自己ハ存在をこし心得

痺為不仁此言最善名状

聖人の大徳ハ
治る人情の誠をこし善なり大なるものにていハ君の百姓を
治る人情の誠をこし善なり大なるものにていハ君の百姓を

風といハ中よりハ不仁の病と名状するハ在るるるるるるる
るゆことをさするるるるるるるるるるるるるるるるるるる

仁者以天地萬物為一體莫非己也

認得為己何所不至

仁者ハ天地の間の一切を
物を吾身と一體とさす

為之と認得ハ何ぞ
至不所ありん

若諸と己有者不
ハ自ら己と相于り
不半且仁氣已不
賈ハ不と皆己不屬
不が如

故博施濟
衆ハ乃聖の功用

仁至言難故止已
立と欲而人を喜連と
欲而全連を能近
取て譬仁の方と謂

可也巳と曰

是の如く仁を觀て
以て仁の体を得可
ら合と欲

生之を性と謂性ハ
即ち氣氣ハ即ち
性生の謂なり

人生氣稟理善惡有

若くは諸の苦と己の心は認りてあはれ
若くは諸の至知として
若くは諸の至知として

己自不與己相于如手足不仁氣已不

貧皆不屬己
小人ハ己が身ハ体もるる心切なり若
己が身ハ体もるる心切なり若

故博施濟
天子將軍の仁心ありて衆
思深を博く万民は施し衆

衆乃聖之功用
仁至難言故止曰

已欲而文己欲達而達人能近取

譬可謂仁之方也已
立身と念願と又ハ志
意を達せん心は神ハ人の

欲令如是觀仁可以
○生

得仁之體
仁を觀るの工夫を如是の如く
○生

之謂性性即氣氣即性生之謂也

人生氣稟理
神明やかりとるる
神明やかりとるる
神明やかりとるる

然れども是性中元
此兩物有て相對而
生ずる小不

幼自而善る有幼
自而惡る有是氣
稟て然くも有也

善固性也然れども
惡も亦之を性謂
不可不也

蓋生之性謂人
生而靜る以上説
容不才小性説時
便已も是性小不也

凡人性を説くは是之
を繼者善也説孟
子性善を言是也
夫所謂之繼者
善也者猶水の流
而下も就が猶也

皆水也流而海に至

聖典余而

有善惡然不是性中元有此兩物相
對而生也
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

有自幼而善
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

有自幼而惡是氣稟有然也
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

也然惡亦不可不謂之性也
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

蓋生之謂性人生而靜以上不容説
才説性時便已不是性也
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

繼之者善也孟子言性善是也夫所
謂繼之者善也者猶水流而就下也
正氣を稟て生ずる人同るが性ハ善く直き清きあり小生て
後よこの體質に於て善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生
ずる濁りて善人悪人智者愚人盜賊倭人種々の生

皆水也流而海

終無所汗此何煩人力之為也
有流何人カ之煩之為也
流て未遠未固已漸濁有出而甚
遠して方濁所有濁之多者有濁
濁之少者有濁濁同不雖然濁
者を以て水と為不可不也

此の如くも則人以此
澄治之功を可
不故力用る可敏
勇る則疾清カ

用ゆると緩急を
則遅く清む

其清及てハ也則
却て只是元初の水
也是清を將て来て
濁るハ換却せ不
亦是濁を取出來
一隅に置在せ不也

水の清則性善之謂
也故小是善与惡与
性中小在て兩物
為て相對て各自
出來不

終無所汗此何煩人力之為也
有流而未遠固已漸濁有出而甚遠方有
所濁有濁之多者有濁之少者清濁
雖不同然不可以濁者不為水也

如此則人不可以不加澄治之功故
用力敏勇則疾清用力緩急則遲清

及其清也則却只是元初水也不是
將清來換却濁亦不是取出濁來置
在一隅也

之清則性善之謂也故不是善與惡
在性中為兩物相對各自出來

此理

此理ハ天命也順而循之則道也此循而之各得其分則教也天命自以て教於至我加損焉焉此舜天下を有而予不焉者也

天地物を生ざる象を觀万物之生意最觀可此元者善之長也斯所謂仁也

天命也順而循之則道也循此而脩之各得其分則教也自天命以至於教我無加損焉此舜有天下而不與焉者也

○觀天地生物氣象○萬物之生意最可觀此元者善之長也

斯所謂仁也

滿腔子是惻隱之心

天地萬物之理無必也對有皆自然子而然安排有小非也

中夜以思不知手之舞之

中者天下之大

○滿腔子是惻隱之心

物之理無獨必有對皆自然而然非

有安排也

每中夜以思不知手之舞之

足之蹈之也

○中者天下之大

地之間亭々當當直上直下之正理出則
是之無一惟敬而
失之無一最盡

伊川先生の曰公則
則一私則萬殊
人心同而不
の〜只是私心

凡物有本末
未を分て兩段の
と為可洒掃應
對是其然必
然所以有

揚子一毛を拔を
不墨子又頂を
踵を放まを
此皆是中と得
子莫が中と執
小至て此二ツの
中と執人欲知

本天地之間亭々當當直上直下之
正理出則不是惟敬而無失最盡
の

伊川先生曰公則
一私則萬殊人心不同如面只是私
心

凡物有本末不可分本
末為兩段事洒掃應對是其然必有
所以然

揚子拔一毛不為墨子又摩頂放
踵為之此皆是不中至如子莫執
中欲執此二者之中不知怎麼執得

揚子以下三人の學風ハ本末の次第あり或一筋又二筋
ありて聖人の道理ハ叶がるなり揚子の學風ハ

經

近思錄卷之一

十一

不怎麼執得

識得者則事
物之上皆天然箇
中有那上不在人
的安排著則不
不也安排著則
則中上不在矣

同時中如何
如何曰中字最
難須是默識心

通且試一廳
言則中央在中
為一家則廳中
中小非也堂中
為一國則言則
堂中小非也而
之中中為此
類推推見可矣

三其門過不入
如禹稷之世小
在中為陋巷小
居若則中非也
陋巷小居顏子
之時在中為

學問吾為不事... 墨子之學風... 人の子也... 執得則事事物上

皆天然有箇中在那上不待人安排

也安排著則不中矣

○問時中如何曰

中字最難識須是默識心通且試言

一廳則中央為中一家則廳中非中

而堂為中言一國則堂非中而國之

中為中推此類可見矣

如三過其門不入
在禹稷之世為中若居陋巷則非中

也居陋巷在顏子之時為中若三過

也居陋巷在顏子之時為中若三過

三其門を過て入ら
不若則中非也

其門不入則非中也

堯帝の御宇に洪水
きりよふて天下は満

大禹と后稷との二人水の道をひいて民を
洪水のうきをのふれりる人々守の暇なくして吾邦の

門前をうびとつれも門は入て吾妻子をうるをてはば
りまて孔子の弟子顔子は諸侯貴人きかびらやまひ

孔子世に在りて世に少く不及と有て常子陋
巷に貧乏の学をたてて聖人の道を楽しめたまひ悠々泰

然していふ心をもゆるふらうしる人禹稷顔子の三人
各々その世に當りて行状ふまひその和節はかまひ中正

の道とつて若禹稷のとき孔子洪水をすいごりて学問を
のりて顔子の時世も出で官禄をむさがりる中正の

無妄之謂誠不欺其次矣

躬行と言ふ
信字真実の四字ハ皆まてしるの四を兼て一念妄想
のきざしとらざるを此誠とて神明小誓をすて心清く

祈願して丹誠をこころに凝らすとらするはちこの誠
のま丹の赤色なり心の臟腑ハその色あつた火の心の誠を

赤心ともいふ又心火といふ詩あり煩悩心の悪しは
ひのま心火然るといふ詞有るや大學に自ら欺む

くといふ有るは一を是ハ不宜とむをいひ人も有るは
大事も有るは又ハ此の事なれむ若し人のま

重て致するは誠なり一段次なり善心なりとて
此事を慎むは誠なり一段次なり善心なりとて

冲漠無朕萬象森然已具未應不

是先已應不是後

理物の備り有るのふて
是の作意とて易とてさふはあはは然るまよその数く小

善悪あるふれりその筋道理のあゆまゆり
善とて肝要の右に記すは説きするは沖漠といふ

まづふふ志すりて何事もなれぬ物のあるは是れ
内朕との無と同断なり然るに内は色々の象既に

子木くとも志がくしてかきり具る有るは是れ何事小
て先きとて行應ふるは最初と思は決
下先きとて又後であるふらうらとる

如百尺

冲漠無朕萬象
森然已具未
應不是先已
不應是後不

無妄之を誠と
謂欺不其次矣
兵

百尺之木根本自
枝葉小至るまで皆
是一貫するが如し
上面一段事形無兆
無却人の旋安排
とて待て引入せ
来る塗轍は入ら放
と道可く不既小是
塗轍却て只是箇
の塗轍

之木自根本至枝葉皆是一貫不可
道上面一段事無形無兆却待人旋
安排引入來教人塗轍既是塗轍却
只是一箇塗轍
右子云る言も入組る言もあ
らで知易きこととの引言こ
はと百尺をくりの太木のて
やうなるども元来根本より枝葉まで理筋は一貫ぬき
るんをこゝろ根本を断切つたに忽ちそのせんくくぐと
しうろ易りのどののたよく上向一段つてくること
形の兆も分りかゝるを人の工夫安排をりて引入
来りて悟をひくこととのやうな道もたぞとく
まて人の行簡そのまゝ行應てう有しうとありし愚る
り精そのその應當なる以前よりまゝく道理へをりり
ちるり別る塗轍のち小あは右太木のたよの如
く本根枝葉一箇は通貫してつてどよめとくちり

近取諸を身取
百理皆具る屈伸
往來之義只鼻息
之間不於て之見
屈伸往來只是
理必ら既屈す
る之氣を將て復
小伸るの氣以爲不
生生之理自然不息

近取諸身百理皆具屈伸往來之
義只於鼻息之間見之屈伸往來只
是理不必將既屈之氣復爲方伸之
氣生生之理自然不息
万物の道の理を
近く人の身を
取らば先づ五尺の体一分の毛の爪の間小
かすりちる屈伸し生々不心
りて自然不息といふはあは
かすりちる屈伸し生々不心
りて自然不息といふはあは
かすりちる屈伸し生々不心
りて自然不息といふはあは

復卦七日心して未
復とて言が如き其
間元斷續せ不陽
已復生の物極れ
必返る其理須く

日來復其間元不斷續陽已復生物
極必返其理須如此有生便有死有
如復卦言七

此の如く有り須生者
便死有始有便
終有

明道先生の曰天
地之間一箇の
感と應と有而已
更小甚事の有

仁を問

伊川先生の曰此
諸公不在自ら之を
思ふ聖賢仁を言
所の處を將て類
聚して之を觀て體
認出來

孟子の曰く惻隱の
心仁也と後人遂
小愛を以て仁と為
愛ハ自ら是情仁に
自是性豈專愛と
以て仁と為可や孟子
の言惻隱之心仁の
端也と既仁の端と
曰これ則便ち之と

始便有終

生々の理の滯留息と云ふは易の復
の卦と二十月の一陽復來の卦なり先正

月天下泰平の卦より二月大壯の卦三月夬四月乾五月
垢六月遯七月否八月小畜九月大畜十月坤
陽氣地中入て寒氣地上小よりむより依て上無月と云
音樂の調子して上無と云ふ又七々日を吊祀と云ふ陽氣
又天小復りて再二人体を得て地の獄と云ふるるる地世界
と云ふもの祈し以上十月七月十日と復の卦と云ふの章の心
天の元氣の断る續と云ふるるるる天地の万物一も生
るや死て極するると云ふるるるる又返ると云ふるるるる生
ると云ふるるるる又死するるるるる始あるるるるる終
ありと云ふるるるる生と云ふるるるる死と云ふるるるる

明道先

生曰天地之間只有一箇感與應而

已更有甚事

先生ハ兄の程頤より天地の間ハ一
陽の氣と云ふるるるる運の盛衰と

物の始り終り事の往來して物と感と
と事と應と云ふるるるるの外ハ甚事と云ふるるるる

問仁

伊川先生曰此在諸公

自思之將聖賢所言仁處類聚觀之

體認出來

言曰所をあたちて類聚て吾身子體解て認んぐみ
バ自然と悟ぞ出來をいそのことと云ふるるるる

孟子曰惻隱之心仁也後人遂以愛

為仁愛自是情仁自是性豈可專以

愛為仁孟子言惻隱之心仁之端也

既曰仁之端則不可便謂之仁退之

言博愛之謂仁非也仁者固博愛然

仁と謂可く不
之博く愛は之仁
と謂言非也仁者
固く博く愛を然に
も便り博く愛に
ると以て仁と為則
ハ不可なり

同仁と心と何異曰
心譬穀種の如生
之性便ち是仁陽
気發處ハ乃情也

義宜と訓と礼と別

便以博愛為仁則不可

惻隱ハ二字よりハ

切子のおけりて井戸に落ちては
行て落んとすれは思へる是れ性小
備る仁の端あり然れども是を直に仁と謂はば
唐の退之先生博く愛するを仁といひ不可なりと惠
仁の一行ともいへり又仁者の心端ともいへり仁といハ天
の如く有て天下ありて行わらるるを仁と謂はば聖とい
ふ但し堯帝舜帝といふは行ひて仁と云ふ

問仁與心何異曰心譬如穀種生之性便是仁陽氣發處乃情也

同仁

の性質仁有といふ又心の有といふその心を仁といふ
の同異いふものといひる程子答て曰五穀の種は
ていふ初て陽気發處乃情なり是れ仁也

義訓宜

禮訓別智訓知仁當何訓說者謂訓

覺訓人皆非也當合孔孟言仁處大

槩研窮之二三歲得之未晚也

諸事の宜節はちを説くは徳有と
心はちを説くは智有り徳有と
説くは礼ハ事なり其の夫ハ小差別あるを上下
如座席衣服容儀言語の異なるをいふと

如何説きや説者よりハ仁ハ覺るること
又人ハ鳥禽ハその性の大に異なること何れもこの説非
と云ふ孔子又孟子の仁を説くは所を大槩に研究
するに三年も工夫をいへば會得さざれば

性即理也天下之理原其所

自未有不善喜怒哀樂未發何嘗不

性即ち理なり天
下之理其自所を
原ぬる未だ不善
有未喜怒哀樂の

訓智と知と訓
仁當何と訓
當説者覺と訓
人訓と訓と謂皆
非也當孔孟仁を
言處と合大槩に
研究する當二三
歳あつて之を得
未だ晚く未也

未也發也未何也
嘗て不善を人発
而節中則往而
善を不無故凡
善惡を言ふ皆善
を先而惡を後
吉凶を言ふ皆吉を
先而凶を後
是非を言ふ皆是
を先而非を後

同心は善惡有否曰
天在てハ命と爲
物在てハ理と爲人
在てハ性と爲身
至るハ心と爲其
實

一也心ハ本善思
慮於發する則善
有不善有若既
謂之則之謂
不可譬水の如
之を水と謂可流
或ハ西行行カ如
小至つてハ却て之
流と謂也

性ハ天於出才ハ氣於
出氣清則才清
氣濁則才濁才ハ見
善有不善有性ハ見

善發而中節則無往而不善故凡言
善惡皆先善而後惡言吉凶皆先吉
而後凶言是非皆先是而後非

善惡否曰在天為命在物為理在人
為性至於身為心其實一也心本善
發於思慮則有善有不善若既發則
可謂之情不可謂之心譬如水只可
謂之水至如流而為派或行於東或
行於西却謂之流也

○問心有
性出於天才出於
氣氣清則才清氣濁則才濁則有

聖典餘節

近思錄卷之一

七十五

不善無○性者自
然完具其信只
是此有者者也故小
四端信を言む

心ハ生道也是心有
ハ斯く是形と具
て以て生を側隱
の心ハ人の生道也

横渠先生の曰く

氣塊然として太
虚より升降飛揚
して未嘗止息
せ未此虚實動靜
之機陰陽剛柔之
始めり浮而上者
陽之清るるり降
而下者陰の濁
るなり其感遇聚
風雨と霜雪と
為萬品之形と流
山川之融結糟粕
煨燼教よ非ざる
こと無き也

游氣紛擾合而

善有不善性則無不善○性者自然
完具信只是有此者也故四端不言

信天より受て生付くを性といふ性の動くこと
るを智といふ是上よる氣質より出たりこれ心

○心生道也
伸るなり右仁義内は備りが故を
○心生道也

有是心斯具是形以生側隱之心人
之生道也人の生て有るは陽氣を以てするの
心有此形は具物なり仁心の主人なり

横渠先生曰氣

塊然太虚升降飛揚未嘗止息此虚
實動靜之機陰陽剛柔之始浮而上
者陽之清降而下者陰之濁其感遇
聚結為風雨為霜雪萬品之流形山
川之融結糟粕煨燼無非教也

○游氣紛擾合
遇て聚り結ぶれ雨風と霜雪と
れわたりて結びて山と川と煨燼と
きハ一して教とすなり

經典餘師

近思錄卷之一

七六

質を成者ハ人物之萬殊を生を其陰陽兩端循環已者天地之大義也

而成質者生人物之萬殊其陰陽兩端循環不已者立天地之大義

天物ハ體して遺不猶仁事ハ體して在

遺猶仁體事而無不在也禮儀三百威儀三千無一物而非仁也

不無が猶也禮儀三百威儀三千一物として仁非と

○天體物不

昊天曰明及爾出玉昊天曰且爾及游行一物之體不無也

昊天曰明及爾出玉

出玉昊天曰且爾及游行一物之體不無也

昊天曰且及爾游行無一物之不體也

鬼神者二氣之良能也

○鬼神者二氣之良能也

物之初て生ざる氣日小至て滋息を物生ハて既ハ盈氣日

○物之初生氣日至而滋息物生既盈氣日反

反而遊散至之謂神以其伸也反之謂鬼以其歸也

性者萬物之一源我之得也私者非也惟大人能其道也

成也彼自蔽塞也吾理順之知者則亦未如何

一故神覺之人身四體皆一物故

而遊散至之謂神以其伸也反之謂鬼以其歸也

性者萬物之一源非有我之得私也惟大人為能盡其道是故立必俱立知必周知愛必兼愛成不獨成彼自蔽塞而不知順吾理者則亦未如

之何矣

一故神覺之人身四體皆一物故

疾而速也

心性情を統る者也○凡物是性有不^有莫^莫通^通蔽^蔽用^用塞^塞子^子由^由所^所以^以人^人物^物之^之別^別有^有蔽^蔽厚^厚薄^薄有^有由^由故^故智^智愚^愚之^之別^別有^有塞^塞者^者ハ

元より心を使ひて行はば何事も心を通ずるは是ハ不行して心を行はば速くして心を通ずるハ速く

○心統性情者也○凡物莫不有

是性由通蔽開塞所以有人物之別

由蔽有厚薄故有智愚之別塞者牢

不可開厚者可以開而開之也難薄

者開之也易開則達于天道與聖人

一前段は心ハ性の喜怒愛樂の情を統る者なり凡物ハ人の外ハ生類

吉凶幸不幸有て通ずるは蔽と開と塞と有る人

物との別あり厚薄有る者ハ牢固く

て是より心開不る厚りのハ開はひ

難はるる薄きりのハ全く開やま

所へ出るは天道は聖人の場

近思錄餘師卷之一終

近思錄餘師卷之二上

為學類凡百十一條

濂溪先生曰聖希天賢希聖士希賢

賢也伊尹取其君不為堯舜一夫不

經典餘師

濂溪先生曰聖希天賢希聖士希賢也伊尹取其君不為堯舜一夫不

近思錄卷之二

一

伊尹之志也

或問聖人之門其徒

三千

獨稱顏子為好學

夫詩書六藝三千

子習而通也然則顏

子獨好也何學也

顏淵怒遷三月不

違仁此の文論語と同一吾餘師志伊尹之

所志學顏子之所學

過則聖及則賢右の心得ハ伊尹の所

及則賢及不則賢

亦令名於失志と顏子の學び方

入心乎存之

蘊之為德行行之為事業

彼以文辭

而已者陋矣聖人の道を聞いて耳を留る

或問聖人之門其徒

三千獨稱顏子為好學

夫詩書六藝三千

子習而通也然則顏

子獨好也何學也

伊川先生曰學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

伊川先生曰

學以至

學ハ以て至聖人之道也聖人學而至可歎曰然之と學の道如何

曰天地精之儲五行之秀と得る者を人として其本也真にして静なり其未發せ未也五性具焉曰仁義禮智信形既生矣外物其形を觸り其中と動さ矣其中動而七情出焉曰喜怒哀樂愛惡欲情

既熾而益蕩其性鑿矣

是故小覺者其情と約中於合使其心を正其性を養ふ愚者ハ則之と制とるを知と其情を縱り而邪僻於至其性を

至思錄卷之二

聖人之道也聖人可學而至歎曰然學之道如何

曰天地儲精得五行之秀者為人其本也真而靜其未發也五性具焉曰仁義禮智信形既生矣外物觸其形而動其中矣其中動而七情出焉曰喜怒哀樂愛惡欲情既熾而益蕩其性鑿矣

天地之氣の正しく精き五行の氣有りて秀りぬが人と生れ来るも本は氣有りて真なりけの無る静なるハ物を感じて動ぬ形は五の性が全具なり胎内より生るや何物も備はる自然の道理なり直なる大木も風も動かしこころ小生るも木目ハ理のこもてその理正中とて得るなり叔人心物はこれなり

是故覺者約其情使合於中正其心養其性愚者則不知制之縱其情而至於邪僻梏其性而亡之

夫のこめて其のこころを中正にして養育するなり愚人ハ制治とて不知と情を縱りて

至思錄卷之二

三

措一而之と亡と

然る小之と學道必
先諸心と明
知然して後力り行
て以て至るを求む
謂所明する自ら
誠なり也之と誠
その道の道と篤
信する乎在道と信
果と則之と守と
固仁と忠信と心乎離
造次必是於顛沛也

然學之道必先明諸心知

所養然後力行以求至所謂自明而

誠也誠之之道在乎信道篤信道篤

則行之果行之果則守之固仁義忠

信不離乎心造次必於是顛沛必於

是出處語默必於是

是出處語默必於是
所養と肝要として力行して志向して求むるは中庸
所謂の心明らるるなりと誠の地位なりとの工夫
その誠の道は今日道と信向するなり
心より実篤たるは仁忠信の工夫心よるなり
造次の顛沛も又顛沛たるは外に出るなり内なる起

是於て
處語黙も必
是於て

久而弗失則居之

安動容周旋中禮而邪僻之心無自

生矣

故顏子所事則
曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非

禮勿動

仲尼稱之則曰

得一善則拳拳服膺而弗失之矣

夫

久而失弗則之
居安動容周
旋礼中而邪僻
之心自生無矣

故顏子事
所則曰非
視勿非礼聽
勿非礼言勿
非礼動勿

仲尼之稱則

曰一善之得則拳拳服膺而之不失矣

又曰怒と遷と過と貳不不善有未嘗知不未嘗知之知らば未嘗て復行ハ未也此其好この篤之と學之道也

然るは聖人ハ則ち思ハ不而得勉め不而中る顏子ハ則ち心ど思而後得必

思而後得必勉而後中其聖人相去一息未と至る所の者之と守る也之と守る小非也其學と好むの心以て之は假まふ事ハ以て之ハ則ち日不而化せん矣

後人達せ不て以て聖ハ本生を以て知學で至可非と謂而して學之之道遂失と

得るはありしをなして手は拳服膺は又曰不遷

怒不貳過有不善未嘗不知知之未嘗復行也此其好之篤學之之道也

然聖人則不思而得不勉而中顏子則必思而後得必勉而後中其與聖人相去一息所未至者守之也非化之也以其好學之心假之以年則不日而化矣

後人不達以謂聖本生知非學可至而為學之道遂失

諸己求不而
諸外求博
聞強記巧文麗辭
所以干為其言
榮華道於至
者有鮮則今
之學顏子之好
所異矣

橫渠先生明道
先生於問曰
性定未
動不
能未
外物於累
何如

明道先生曰謂
所定者動也亦
定靜
亦定將迎
內外無
苟也
外為已牽而
之小從是已
性以內外有
為也
且性以物外
小隨
外在時當
何者內在為

不求諸己而求諸外以博聞強
記巧文麗辭為工榮華其言鮮有至
於道者則今之學與顏子所好異矣
學問已身之德を研して私己と去て人欲を心
生せしむ外の望福をばらばらとせしむるは世間
名をせしむる利得志向の中心なり
博く人の説をきき記し文章を麗し巧く説小
華と榮して篤行信実の道より異るなり
寄るなり顏子好むところとハ異なるなり
○横渠
先生問於明道先生曰定性未能不
動猶累於外物何如
横渠先生曰程子の
問答なり性を定むる

明道先生
曰所謂定者動亦定靜亦定無將迎
無內外
心を悟得たりといふ心の盤石の如く
沛の沖ていう動顔をも定まりて動くは靜
なり所ても別よ不動の工夫して然りと
を只いふの心自然して將迎るといふ
もろく内の外のとり隔もあらずと
苟以外
物為外牽已而從之是以已性為有
内外也
心をもつて外より誘きしむる物に牽
れ返る迷惑
且以性為隨物於外則當
其在外時何者為在內
性を以て外物
を引を隨順とせ

是外誘之絶於
意者而性之内
外每事不知不也

既之内外以て二
本と為則又鳥ど
處み定ること語
可也

夫天地の常るは
其心万物小普而
心毎ことあり聖人
之常其情万事
小順が而情毎を
以て故君子の学
廓然と而大公物

の来而順應する
若莫

易曰貞吉悔亡
憧憧往來朋從爾
思

是有意於絶外

誘而不知性之無内外也

既以内外為二本則

又鳥可遽語定哉

夫天地之常以其心普萬

物而無心聖人之常以其情順萬事

而無情故君子之學莫若廓然而大

公物來而順應

地の常久して無我無心自然の大徳なり聖人も又
同く天の万物を生きたまふまひく平常仁恵
の情と以て萬事品く小應く万民仁恵と施し
たりとも是まこと自然の大徳とて別な情と用ゆる
物事君子の学向ふ実小大公廓然して私心なく
物事事きうりうりその理く順がひ應トる

易曰貞吉悔亡憧憧往來朋從爾

思

易有咸の卦の爻の語く憧憧とハ人の往つ來つ
る心を負るるの卦の心ハ人ハ免まも角も身を
固る心を負しつて戒めを守ること第一義と
ナ上の段しつて胸中常小廓然ありとハ外物
よめる煩累する負したる小之感應するは
言事して悔するもつて七きゆかぬ不
善私己の不美なる朋の事の出きこりて再思
よ應し感通して從附つて災禍身の苦
とるる慎しむる苟

苟くも外誘之
 除規規於外
 將東於滅而西於
 生々を見んと將也
 惟日之足不非
 顧ふ其端窮
 無得而除可
 小不也

人之情各蔽所
 有故道道通
 と能不大牽患
 於在
 自私而智と用る
 自ら私を則為

有以て迹應
 為能不智
 と用る則ハ明學と
 以て自然と為こと
 能不

今外物之惡之心
 以て而物無之地
 を照をことと求む
 是鑑と反而照さ
 んことと索也

易曰く其背小
 艮て其身を獲
 不其庭を行て
 其人を見不

規規於外誘之除將見滅於東而生
 於西也非惟日之不足顧其端無窮
 不可得而除也

人之情各有所蔽故
 不能適道大牽患在於自私而用智

用智則不能以明覺為自然
 自私則不能以有為為應迹

今以惡外物之心而求照無物之地
 是反鑑而索照也

艮其背不獲其身行其庭不見其人
 易曰

易の艮の卦の詞より上の段の意をいふ
 動の理小叶て其の背をいふ人の身ハ
 動の理小叶て其の背をいふ人の身ハ

孟氏亦曰智之惡所の者ハ其鑿と云るガ為也

その身とするを得ざる
がゆゑその身と不獲と云く

孟氏亦曰所惡於

智者為其鑿也

孟子の仰せ 智のさうじ
くといひ能くさうじらん
は用ひくふ依てハ惡むべしハ物との理よいて
一通りハその道理をこきまゐるハハ底の底まで
穿つハ惡むべし世よりハる理窟臭くハる理の一通りハ
わきまきへハ窟として死の隅くまでハくさるる鑿

與其非外而是内不若内外

之兩忘也兩忘則澄然無事矣無事

則定定則明明則尚何應物之為累

哉

外と非ハ非ハ人を非ハ内を是ハ
を去てハ大なるハ内外の隔ハ
小なるハ両忘ハ忘消ハハ万夏澄くして濁す濁

る則ハ尚何物ハ應ざるハ累と為哉

たゞ毎事として事の道理わかれ定まりて明らか
なるまゝなるたハ物ハ應るハ累熱ハ

聖人之喜以物之當喜聖人之怒以

物之當怒是聖人之喜怒不繫於心

而繫於物也是則聖人豈不應於物

哉鳥得以從外者為非而更求在内

者為是也今以自私用智之喜怒而

視聖人喜怒之正為如何哉

喜ぶべきこと小怒らざるは向方より来りて
道理小なること此方の心撃をわづらふことハ

非ハ聖人ハ是より来る物ハ應ハ外ハ從ハ
非ハ内ハ求ハ是ハ是ハハ小人私己の智と喜

聖人之喜ハ物之當喜ハ當と以てハ聖人の怒ハ物之當怒ハ當と以てハ是聖人の之喜怒心於繫ら不而物於繫ら也是則聖人豈物於應不哉鳥外ハ從者也

聖人の喜ハ物之當喜ハ當と以てハ聖人の怒ハ物之當怒ハ當と以てハ是聖人の之喜怒心於繫ら不而物於繫ら也是則聖人豈物於應不哉鳥外ハ從者也今以自私用智之喜怒而視聖人喜怒之正為如何哉

之用ゆり之喜怒と
以て聖人喜怒の
正を視如何と為
哉

夫人之情幾一易
而して制し難き
者惟怒と甚と

時於遠其怒を
忘れて理之是非を
觀ハ亦外誘之悪
小豆ら不と見る可
而道子於ても亦思
ハ半不過る矣

伊川先生朱長

怒を用ゆり仕方と聖人喜怒の正に視集
て如何の所も分明なるべし
夫人之

情易發而難制者惟怒為其第能於

怒時遠忘其怒而觀理之是非亦可

見外誘之不足惡而於道亦思過半

矣
人情就て考ふ小制らざるは怒の
心と但し工夫あり何ぞ腹怒くるの
處と怒と

伊川先生答朱長文
○伊川先生答朱長文
意得たるべし

書曰聖賢之言不得已也蓋有是言

則是理明無是言則天下之理有闕

焉如彼耒耜陶冶之器一不制則生

人之道有不足矣聖賢之言雖欲已

得乎然其包涵盡天下之理亦甚約

也後之人始執卷則以文章為先平

生所為動多於聖人然有之無所補

無之靡所闕乃無用之贅言也不止

贅而已既不得其要則離真失正反

害於道必矣
程先生の友朱長文より學問
の工夫ハ文章のみありは
程子の

文と答る書曰
聖賢之言已して
得不得也蓋此言
有則ハ是理明ら
るあり是言毎則ハ
天下之理闕ること
有焉彼耒耜陶冶
之器一不制則
生人之道豆不
有るべし矣聖賢
之言已んと欲し
雖得んや然ると
其天下之理と包涵
して亦甚と
約まらず也後之人
始て卷を執則ハ文

程先生の友朱長文より學問の工夫ハ文章のみありは程子の

章之先以為平生為所動者
聖人於多然
之有補
所益之益
國所靡乃
益用之贊言也止
賢而己
既其要得不
則真離正
失反道害
必世
來書所謂後人
不其善忘
不欲此乃世人

今人の著述して己名を
論孟の書あるて天下の理人間の道
未相陶治の器の
不足くその如く
天下の道理を包涵
不残約述有り
文章の先
人の書物
見其不忘乎善此乃世人之私心也
來書所謂欲使後人
反りて道の害
見其不忘乎善此乃世人之私心也
夫子疾沒世而名不稱焉者疾沒身
無善可稱云爾非謂疾無名也

之私心也夫子世
而名不稱焉
者疾沒身
善の稱可益
疾て云名益を
疾し謂ハ非也
名ハ以て中人を
厲す可君子は
存する所没する
所ハ非也
内忠信を積徳
小進む所以
言と揮い志
篤業を居る所以也
至ると知て之に至る

書は文章と著述ハ後の人小善道と心は不忘が為とあ
れども是中人ハ私己の心と己が名とむさがるもの
論語は名を世小稱られざると思は有る吾身は称
る善行を世を恥惡むと名を世に揚るは非
名者可以厲中人君子所存非所没
汲
以上の人之心存中
と求むる心は汲
内積忠
信所以進徳也擇言篤志所以居業
也
胸の内小忠臣の実徳を積た
きたる心は出る言
知至至之致知也求
知所至而後至之知之在先故可與

幾所謂始條理者智之事也

德進む
糸目と

智者と聖者との二段を説く。至善の地に至るべし。目付所を知てそのち至る。知る。先小

有事の幾を端先を見付る。人の幾を條理の

案の始鐘と。知終終之力行也。既知所

終則力進而終之守之在後故可與

存義所謂終條理者聖之事也。此學

之始終也

至善の全備として道理を尽す。終る。カキ行の工夫あり。至善と遂終り守持

と。天下の事小。於て何一ツ。義子服。ハ。音の鳴り

の條理をて。曲を終る。この段ハ聖人の徳ハ

備具ふた。孟子は。夫子の。君子主敬

以直其内守義以方其外敬立而内

直義形而外方義形於外非在外也

君子の道ハ心の内小敬と主人として大坊と守る。心

の外に。行状。方正。但。義ハ外子

敬義既立其德盛矣。不期大而大矣

而大矣。無所用而不周。無所施而

不利。孰為疑乎

敬義立。心は。徳大なるを期せし。ハ

其外方。義形於外。非在外也

ハ致知也。知て至る。所と求て。而して。後小之。至る。之。知。先小。在故。小。幾。之。可謂。所條理と始る者。智之事也。終。之。終。力行也。既。終。所。之。則。力。進。而。之。終。之。守。後。在。故。小。義。之。存。可謂。所。條理と終る者。聖。之。事也。此。學。之。始。終。也。

君子敬と主。て。以て。其。内。を。直。其。外。を。方。以。て。立。而。内。直。義。形。於。外。非。在。外。也。敬。義。既。立。其。德。盛。矣。不。期。大。而。大。矣。無。所。用。而。不。周。無。所。施。而。不。利。孰。為。疑。乎。

所利せ不て其
孰疑い為乎

動小天と以てする
の妄妄と為動く
人欲と以てする
則ハ妄有り矣
妄の義大なり矣
哉邪心無しと雖
苟正理合小則
妄也乃邪心也既
小己小妄有り
往有宜く不
往則ハ妄也故
妄之象曰其正
匪之象曰其有

往攸右不利不
人之蘊蓄ハ学
由て大なり多
前古の聖賢
之言と行と聞
小在跡と考て
以て其用と觀言
と察して以て其
心と求め識して
之と得て以て其
徳と蓄成とす
咸之象曰君子
以て虚して人と
受く傳曰中
私主無則感と
る通たむ

大より人へ歸服するが故に
依て施し用ゆる所ハ人の利なるが故に
動以天為無妄動以人

欲則妄矣無妄之義大矣哉雖無邪
心苟不合正理則妄也乃邪心也既
已無妄不宜有往往則妄也故無妄
之象曰其匪正有眚不利有攸往
も此の體も何ぞと云ふも為行も私己氣女
も天然自然に任せりと易きの無妄の卦
す妄する心の無き心を得るなりたに邪心
の正理筋正しかりぬる妄といふの
り邪心といふの無妄といふの至然の地も止する

○人之蘊蓄由學而大在多聞前古
聖賢之言與行考跡以觀其用察言
以求其心識而得之以蓄成其徳

咸之象曰
君子以虚受人傳曰中無私主則無

感不通
以量而容之擇合而

受之非聖人有感必通之道也

私已の量

量は而之と容合
受て受容る
又向の心は合せん
擲て受る
非

其九四曰貞吉悔亡憧憧往來朋從

爾思

前の段の說

傳曰感者人之動也

故感皆就人身取象四當心位而不

言感其心感乃心也

感は心の物
より感ずるも自然

言人の心感乃心也
感は心の物
より感ずるも自然

則害於感通所謂悔也聖人感天下

之感無所不通有所私係

之心如寒暑雨暘無不應者

亦貞而已矣

感は心
通は心
私は心

有則感通於害
謂所悔也聖
人天下之心
感
寒暑雨暘

の如く通せず
之
負者亦貞而已矣
之謂也

然用其私心以感物則思之所及者

私心

有能感而動所不及者不能感也

以有係之私心既主

ハ前段の細い説
ハ前段の細い説

ハ前段の細い説
ハ前段の細い説

所の者註感して
動て有及不所の
者ハ感ざる註
ハ不也

係る有之私心
と以て既一偶一事
於主してハ豈能
廓然して通せ
不所無乎

君子之艱阻子遇
必を自身於者
失而之致有乎
未善之不善
有則ハ之と改む
心於歎たる
無則ハ勉と加て

乃ち自ら其徳と
脩む也
明非則動之
所無動非
れ則明用る所無
習ハ重習也時復
思繹中於決
洽と人則説也
善と以て人及
而信従たる者衆
故少樂も可也
人及ぶ於樂す
雖も是を見
不而悶々毎
乃ち謂所君子

於一隅一事豈能廓然無所不通乎

○君子之遇艱阻必自省於

身有失而致之乎有所未善則改之

無歎於心則加勉乃自脩其徳也

○非明則動無所之
非動則明無所用

習也時復思繹決洽於中則説也以
善及人而信従者衆故可樂也雖樂
於及人不見是而無悶乃所謂君子

習重
字向ハ習と第一の字ハ和訓する
師のすねびとす
幾切ハ和ハけ習と重
常時心ヲ思案尋繹をもちハ心の中ハ
決洽して合点ゆが故ハ心喜悅する
善行人ハ人より信向してき
者衆くるハ心喜む
信向するハ心喜む
○

古之學者ハ已カク
得之於己也今之
學者ハ人の為
之欲見知於人
也今之學者ハ
人の為之欲見
知於人也

伊川先生方道輔
曰聖人之道坦
如大路學者其
門不得病耳其
得之不可到也
求入其門不由
於經乎

古之學者為己欲得之於己也今之
學者為人欲見知於人也

伊川先生謂方道輔曰聖人之道坦如
大路學者病不得其門耳得其門無

遠之不可到也求入其門不由於經
乎

方道輔先生之友人曰聖人之道坦如
大路學者病不得其門耳得其門無

遠之不可到也求入其門不由於經
乎

方道輔先生之友人曰聖人之道坦如
大路學者病不得其門耳得其門無

遠之不可到也求入其門不由於經
乎

方道輔先生之友人曰聖人之道坦如
大路學者病不得其門耳得其門無

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦

其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之學者の經書の治脩ハ衆の人
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

今之治經者亦衆矣然而買積還
珠之蔽人人皆是經所以載道也誦
其言辭解其訓詁而不及道乃無用
之糟粕耳

と知しす勉めを
加へず而自
止註ハ不矣

明道先生曰
詩と脩りて其誠

會せ不バある可
く不言註言

詩を脩飾する
心と為せバ只是

偽り也

其言辭と脩む
るか若き正ま

か之誠意と立
人乃ち其自
家敬以て内

直義を以て
外を方小と爲
を體當せん

道の浩浩何の處
キ下人惟誠を

立一線居可之處
有居可之處有則ハ

以て業と修む可也
終日乾々たる大小

の大事却て只是忠
信徳を進む所以

實下手と下と處
為辭を修めて其誠

を立るを實業と
修むる處と為

るみしむて下經書小由詠て勉めたる異日ハ卓爾
し心見識が立てしるるハ心の面白さハ手豆の端
舞つて止るるを勉めよ ○明道先生曰脩

辭立其誠不可不子細理會言能修

省言辭便是要立誠若只是脩飾言

辭爲心只是爲偽也 聖人の

誠實信実小心を以てして其誠の一字と執立るを

若脩其言辭 若し其言辭を修むれば

正爲立己之誠意乃是體當自家敬

以直内義以方外之實事 右の

道之浩浩何處下 道之浩浩何處下

手惟立誠纔有可居之處有可居之

處則可以修業也終日乾乾大小大

事却只是忠信所以進徳爲實下手

處修辭立其誠爲實修業處 聖人の道

誠を胸中小するを安心して居べきところなり

聖人の道は、心を正しくし、言行を修め、誠意を立てることである。明道先生は、詩を修飾するだけでは偽りであり、心から誠意を持って言動を修めなければならぬと説く。直内義、方外之實事、道之浩浩何處下、手惟立誠、纔有可居之處、有可居之處、則可以修業也、終日乾乾、大小大、事却只是忠信、所以進徳爲實下手、處修辭立其誠爲實修業處、誠を胸中小するを安心して居べきところなり、忠信を主として守るは是こそ手を下し安心の如く右小

伊川先生の曰道志
志を修めざるは
志を修めざるは
志を修めざるは
志を修めざるは

孟子才高之學
依據可宜學者當
顏子之學當聖人
得て錯ら不んことを

要と須く是顏子
を學須
明道先生曰且外事
を省但善乎明
文章中ら
かを疾守る所約
せ不は溢と望

學者仁の體を識得
して実小諸已有せ
ハ只義理栽培せん
を要せよ經義を求
か如く皆栽培之意

經典余市

伊川先生曰志
修治の場所ありとせ

道懇切固是誠意若迫切不中理則

反為不誠蓋實理中自有緩急不容

如是之迫觀天地之化乃可知

○孟子才高學之無可依據學者

當學顏子入聖人為近有用力處又

曰學者要學得不錯須是學顏子

○明道先生曰

且省外事但明乎善惟進誠心其文

章雖不中不遠矣所守不約之溢無

功

○學者識得仁體實有

諸已只要義理栽培如求經義皆裁

培之意

仁ハ木の徳也己が取仁の木體を會得

して心は義理を栽培養育して肝要と

肝要と

肝要と

肝要と

昔學於周茂叔受
每顏子仲尼樂
處尋令樂所
何事

○昔受學於
周茂叔每令尋顏子仲尼樂處所樂
何事

見所期之所遠
不可不然而之
亦力之量而漸
有須志大

○所見所期不可
不遠且大然行之亦須量力有漸志

事之敗朋友
講習更相觀
而善之工夫多
如莫

○朋友講習更相觀而善工夫多
大心勞力小任重恐終敗事

須是其心在大
下開洞使須
九層之基為如
須大脚做方
得須

○須是夫其心使
開闊譬如為九層之基須大做脚方

明道先生曰舜
之中小幾有自
教海於拳之
也須這裏從過
須

○明道先生曰自舜發於
畝之中至孫叔敖舉於海若要熟也

參也竟小魯以
之得

○參也竟以魯得之

明道先生記誦博
識以物也玩心

○明道先生以記

聖人之跡

○明道先生以記

身之深

○明道先生以記

要

○明道先生以記

中

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

要

○明道先生以記

志を起ふと為す

礼樂ハ只進反之間不在便ち性情之正を得

又子君臣天下之定理之天地之間於逃る所無

天分を安し得て私心有不則ハ一の不義を行ハ一の不事と殺し

誦博識為玩物喪志

誦博識を又ハ詩文を作るハ実学ハハ物を記

禮樂只在進反之間便得性情之

正 礼ハ行儀堅固成ガ中人進クハ依テ進ム以テ有文

父子君臣天下之定理無所逃於天地

之間 君臣の義の重ク又子の孝道の深キ

安得天分不有私心則行

一不義殺一不享有不為 天地自然

此所を安得て私欲の

為不所有分毫の私

有は便ち是王者

の更は不

性を論じ氣を論

不備り不氣を論

て性を論ぜ不明

則は是は不

學と論せ便ち理を明

治を論せ便ち須

體を識須

有分毫私便不是王者事

論性不論氣不

備論氣不論性不明一之則不是

性

論學便要

明理論治便須識體

終始先後本末

天下の政

格と不知

不為

曾點漆雕開已見大意故
意之見故聖人之
小与と

根本須是先培
壅と須然と後趨
向と可也趨向既
平と先を造所此淺
深則勉と勉不子
小由也

敬義夾持して直
上と天徳と達す
此自と

懈怠一と生便
便ち是自棄自暴
る

學び不は便ち老而
衰は人之學進ま
不は只是勇は不
る

學者氣は勝る
所習は奪は所為
小只志を責へ

内重則以て外の輕

○曾點漆雕開已見大意故

聖人與之見識ハ道體の本をり漆雕開の

根本須是先培壅道術の大概をいふ夫

然後可立趨向也趨向既正所造淺

深則由勉與不勉也樹本をそとつて先

敬慎を加置て夫より夫趨向をとりつべし

敬義夾持直上達次第よとつてみゆく所の深く重きと又淺く深

天徳自此敬義の二をりて内外を夾持する

懈怠一と生便私欲のわづらひを直上りて

棄自暴人懈怠の氣かゝり

便老而衰天の眞加を

人之學不進只是不勇暴の念

學者氣勝所習は奪は

所習奪所為小只志を責へ

存念は立は派は

學者為氣所勝習は奪は

奪只可責志勝るなり依て世人の勢の時

内重則可以勝外急度志向を責むべし

小勝可

得之深則見誘之小

董仲舒の謂く其義を正しく謀り其利を謀らざる其道を明らふは其功を計らざる

孫思邈の曰く大智と欲而心小智と欲を智ハ圓と欲而行いと

之輕

道義の心内子重障を人欲の私意ハ輕

得

得深則可以見誘之小

道義の心

取

取らば外に誘ひ欲の障

董仲舒謂

正其義不謀其利明其道不計其功

此の段ハ董仲舒先生の語より膽ハ大なるを

有りのありと大儒君子は是を大膽不敵と

中一の武士識の心は名高君子大儒の首と

孫思邈曰

膽欲大而心欲小智欲圓而行欲方

可以為法矣

上の二段を程子先生評を

大抵學不言而自得者乃自得也

有安排布置者皆非自得也

視聽思慮動作皆天也人但於其

中要識得真與妄爾

明道先生曰學ハ只

鞭辟の裏ハ近

明道先生曰

近思錄卷之二

已小著之要也
而已故切問近
思則仁在其中
小在矣

言忠信行篤敬
而後居之邦之
行也
言忠信行篤敬
而後居之邦之
行也
言忠信行篤敬
而後居之邦之
行也

學只要鞭辟近裏著已而已故切問
而近思則仁在其中矣
學問を多岐にわたるが、
為や利欲の為や

言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉
言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉
言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉

言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉
言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣
不忠信行不篤敬雖州里行乎哉

立則見其參前於
見也與在則其
衡於倚也夫然
後行也
只此是學

質美者明得
渾化也
體而同之
其次惟莊敬持
養至其至小及
則一也

於前也在與則見其倚於衡也夫然
後行只此是學
於前也在與則見其倚於衡也夫然
後行只此是學
於前也在與則見其倚於衡也夫然
後行只此是學

與天地同體
其次惟莊敬持養及其至
則一也
與天地同體
其次惟莊敬持養及其至
則一也
與天地同體
其次惟莊敬持養及其至
則一也

忠信德進其所
以有辭を備めて
其誠を立業居
を所以者ハ乾道也
敬以て内を直し
以外を方小とする者
ハ坤道也

凡人才小學ハ便須
かゝる力に著る處を
知る須既ニ學でハ便
ハ須須々々力に得
る處を知須
人有園圃を治め知
力に役して甚勞
先生の曰盪象小君

子以て民を振徳
育ふ君子之事唯此
二者有餘ハ他無
焉一の者ハ已と為
人と為之道也
博く學而篤く志
切らば向而近し思何
を以て仁其中不在
言ふ矣學者思ふ
て之を得る要す
此を了せんハ便是
徹上徹下之道なり

○忠信所以進德
誠所以居業者乾道也故以直内義
以外外者坤道也
辭ハ誠なり故
敬と美とを以て
坤ハ陰にして
凡人才小學ハ便須
かゝる力に著る處を
知る須既ニ學でハ便
ハ須須々々力に得
る處を知須
人有園圃を治め知
力に役して甚勞
先生の曰盪象小君

凡人才學便須知著力處既學便須
知得力處
○有人治園圃役知力甚
勞先生曰盪之象君子以振民育德

君子之事唯有此二者餘無他焉二
者為已為入之道也
博學而篤志切問而近思何以言仁
在其中矣學者要思得之了此便是
徹上徹下之道
弘

弘ひろ而を教をるを不ま則ま立た難が毅く而も弘を不ま則ま以て之を居ると云々

伊い川せん先生の曰く古の今の之の學者ハ優柔厭厭飲飲一一場の話説を做て高を務る而已也

常と小と杜と元と凱との語と愛江と海と之と浸と膏と澤と之と潤と若と渙と然と

して水の釈の怡然然ときき理理順順ふて然然て後得得とと為為也也

今の之の學者ハ往往々々游遊夏夏を以て小小小して学ぶ足不不とと為為然然とと游遊夏夏の一言一事一却却て摠て是實實

後の之の學者ハ高高を好む於游遊如如然然自自身身却却只只此此小小在在

經典餘師

而不教則難立毅而不弘則無以居

之車の積がゆり弘ひろく毅不ま夫の形の弘をるゆり弘積がゆりとるの毅を弘ひろく毅不ま夫の形の弘を

積積方方一一生生涯涯身身付付て同離離

○伊川先生曰古之學者優柔

厭飲有先後次序今之學者却只做

一場話説務高而已伊川の語り古の学同

然と腹中十分してゆるやうにて内よりくちくちと

愛杜元凱語若江海之浸膏澤之潤常

渙然冰釋怡然理順然後為得也子程

常と小と元と傳との序を認め杜元と凱と先と生との語と愛江と海と之と浸と膏と澤と之と潤と若と渙と然と

今之學者往往以游夏為理ゆゆれれ順順ふて然然て後得得とと為為也也

小不足學然游夏一言一事却摠是

實當時の學者ハ高を好む於游遊如如然然自自身身却却只只此此小小在在

後之學者好高如人

游心於千里之外然自身却只在此

後の之の學者ハ高高きをばくり口をきく於游遊如如然然自自身身却却只只此此小小在在

近思錄卷之二

十五

修養之年を引所
以國祚之天の永命
を祈る所以常人
聖賢於至比皆工夫造
裏に到る則此應有

忠恕ハ公平なる所以
徳は造る則ハ忠恕自
を其致リハ則公平

仁之道之を要する
小只消一の字を道
公ハ只是仁之理公を
將て便ハち喚で仁と

做可くハ不公而人
を以て之ハ體を故
小仁と為

只公為則ハ物我兼
照故ハ仁能恕を以
所以能愛する所以
なり

恕則ち仁之施ハ愛
則ち仁之用也

今之學を為者ハ山
麓に登るか如ク其途
不ハ開歩及到峻處
莫不須是要則

聖典餘而

○修養之所以引年國祚之

所以祈天永命常人之至於聖賢皆

工夫到這裏則有此應

修養の往方あり國家御代の永命ハ天命ハかるべし
の人も同断するべき常の人の聖賢をうかぶべきハ

功を積でつとめるは這裏に到るの應有とぞ

○忠恕所以公平造徳則自忠恕其

到則公平 忠を以て恕察とハ心も公大なるりて
平ハ小安心するり私欲の心を止む

○仁之道
時ハ心よりハ必一定あり依て徳と造るハ
忠信の所より造る其致ハ公平とあるハ

要之只消道一公字公只是仁之理

不可將公便喚做仁公而以人體之

故為仁 仁の道ハ公大の心を肝要とハ但仁の道
理ハ公大と喚做ハハ心ハ公大の心を肝要とハ但仁の道

只為公則物 心の忠信を吾體ハ引きて深切ニ工
夫を盡してハ仁の道ハ會得るべし

我兼照故仁所以能恕所以能愛の

情を伸ハ深切なるり物と愛ハ

恕則仁之施愛則

仁之用也 忠を以て人情を恕推ハ仁を施行する

○今之為學者如登山麓方其途

莫不開步及到峻處便止須是要則

聖典餘而

必到乎不及んで便ち
止須くは是剛決果
敢て以て進んことを
要すべし

人か行はば要すは謂
ハ亦只是淺近の語

人既に能く一切の事皆
當ふ為當所と知見を
るに必ぞ意を著る
を待不便は是箇
私心有這一點意氣
能幾く時を得了

之と知むは必らむ之
と好む之を好めむ
之を得

古人此箇の学は是
身と終事果能顛
沛造次必らむ是
必於せば豈道理
を得ざるを有や

決果敢以進

今時の學者ハ浮氣のみ小く
心安くハ習ふんとたつたを兼ふ
ハ大息して止る元來剛敢は果決る志向が
故

人謂要力行亦只是淺近語

常語をか行はば要すは謂
悪きこともしもいふまじらるれども必竟淺近なるいひ

人既能知見一切事皆所當為不

必待著意終著意便是有箇私心這

一點意氣能得幾時了

此の事や六ヶ敷あるまひり
と著意するは私心といふ
點をくりその迷はるる
○知之必好之好

之必求之求之必得之

實は學問の志向
そのハ既は道理
を知るは心より深く好
とるは求むるとは好む
古

人此箇學是終身事果能顛沛造次

必於是豈有不得道理

學問の終身の事
顛沛造次は心は是れ
多を豈は道學の義理を不自得するを有べきやとる

近思錄餘師卷之二上終

